

8・25「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある』ということ、また、わたしが、自分勝手には何もせず、ただ、父に教えられたとおりに話していることが分かるだろう。」…30 これら二つのことを語られたとき、多くの人がイエスを信じた。

「人の子を上げる」というのは文字どおり十字架に掛けるという意味と、神のもとに上げられるという意味が掛け合わされています。そこで、ひとびとが信じる根拠は、「人の子を上げた時」(8・25)つまり十字架なのです。

この言葉を聞いて、多くの人たちはイエスを信じました。いま多くのひとたちは、病を癒やされるなどの直接救いに与ることがなくとも、十字架の時を迎えた後に、イエスの言葉を受け入れてその言葉にとどまるならば、おなじく救いに連なることをイエスは説き明かされています。

福音書を読んでいるうちに、いろんなことについて考えをめぐらせます。そのひとつは、わたしが信じているのはなにゆえだろうとどうしてですか。つらい経験はあったけれども、聖書にあるように病気を癒やされたような決定的な瞬間がないからです。教会にいるひとの中には、そういうひとでも結構多いと思います。

聖書のことと教会のこととも、よく分からないけれども、ともかく分からないままに聖書を読み、分からないままに

祈り、紆余曲折があったけれども、ただ教会で繰り返して語られる「十字架」という言葉に拠り所を見だし、ともかく教会にとどまり、つまりイエスの言葉にとどまってきたのです。10年、20年が過ぎ去り、過去を振りかえると、「自由」という言葉の意味も分からなかったあの頃よりも、少しはよく分かるようになった、その少しが何物にも代えがたい喜びなのです。

31 イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは眞理を知り、眞理はあなたたちを自由にする。」

しかしながら、信じないひとたちの言い分もあります。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことはありません。『あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」彼らは、ユダヤの伝統に自負心をもち、堅く立っているのです。イエスの言葉を受け入れることができません。

教会の外にあるなにかに拠り所をもっており、自負心の強いひとは、キリスト教でなくとも生きていけるだろうと思います。それでもそんなひとたちも、教会の交わりをおして自由になれば、つまり「こだわり」から解放される経験があれば、キリストを信じるだろうなと思います。そういうひとは往々にして自分は自由であると自認していることがあると思われれます。

33 すると、彼らは言った。「わたしたちはアブラハムの子孫です。今までだれかの奴隷になったことは

ありません。』あなたたちは自由になる』とどうして言われるのですか。」

しかしながらどんなに自由に振る舞っているひとでも、そのひとの悩みを抱えていると思います。どこかで罪責を感じているからです。だれしもみな、その人ひとりひとりをもっとも大切なところで支えているのは良心だと言えないでしょうか。

具体的な経験をおして自分ひとりで良心に目覚め、学び、苦勞しながら自分自身の人格を育ていくひとでもあります。つまり人格育成においても独学の道もあると思います。しかし何事か独学である程度のことを修めたひとは知っています。独学で何かを修めたひとは天賦の才があるひとと才能はあまりないけれど努力をおしまひひとがあると思います。

独学の欠点は、回り道が多く、失敗も多く、無駄も多い、もしもおなじ道を歩んでくる先輩があれば、教えてあげることがあるのに謙遜に思っひとがどんなに多くいるでしょう。知性や体力を成長させるために学校、先生やコーチがいるように、ひとの人格を成長させるために先生がいることはよいことです。

教えるひとが天賦の才があろうと努力タイプであらうと、決定権を持つのは教える相手です。もしも自分に揺るぎない自負心があれば、おまえなんぞいらないと撥ね除けてしまつてしまう。

教える人が神から遣わされた方だとしても、決定権は神

の言葉をつけるわたしたちにあるのです。イエスは神の言葉を与えようとするけれどもそれを「受け入れられない」のです。口語訳では「根を下ろしていない」と訳されています。ペシタというシリア語をみますと「あなた方は自らを空虚にしなさい」といいます。直訳によれば「わたしの言葉があなたの方の中で進んでいかないからだ」となります。

イエスが十字架に挙げられた時、イエスは小さな一粒の存在でありながら、世界は彼のためにあり、彼の命もまたわたしたちひとりひとりのためにあることを、ひとりとは知ったので、信じたと思います。

つまり神の言葉そのものにひとりびとの心の中に進みゆく力を持っているのです。その力を阻むのはひとりびとの受け入れない、心をむなしくしないところに原因があると聖書では読み取ることができます。

先日ナショナル・ジオグラフィックで92歳の高齢の男性へのインタビューの動画をみました。その男性は、何らかのことで人前で講演する機会があり、そのことを紹介していました。

話を終えて、会衆中にいたユタヤ教のラビがあなたのお話を短く要約しましょうと申し出てきました。ある譬えを教えてください。

わたしたちがはいっている「人生にはふたつのポケットがある」、右のポケットに紙切れが入っている、その紙切れには、「わたしは塵」と書かれている、もう一つのポケットにも紙切れが入っていてそれには「世界はわたしのためにつくられた」と書かれているのです。つまりわたしは多くの人々の砂浜にある一粒に過ぎない、そのわたしが出会っているあなたはわたしのためにつくられた命である、またわたしもあなたのために命を与えられたのだということです。